

国

語

(60分 120点)

注 意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数を確かめてから始めなさい。
- 三 問題は二十三ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはっきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

受験番号

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

主人公のサーリヤはクルド人（独自の言語や文化を持ち、特定の国を持たず、トルコ、イラン、イラク、シリアなどにまたがって居住している）で、六歳の時、トルコから追われるように両親と日本にやってきた。日本に来てから十二年の間に、妹のアーリン（中一）、弟のロビン（小一）が生まれたが、二年前に母親は病気で亡くなってしまった。来日時から難民申請（自国で迫害を受ける恐れのある外国人が保護を求めること）をしていたが、このたび不認定と決まり、在留資格（外国人が日本に住むことができる資格）も与えられなくなってしまった。今までサーリヤは住んでいる埼玉県の川口から荒川を渡った先にある東京の赤羽にあるスーパーでアルバイトをしていたが、在留資格を失ったことでクビになってしまった。父親も規則を破って県外で仕事をしていたため東京出入国在留管理局（入管）に収容されてしまった。最初、父親は裁判を起こすつもりだったが、一転して自分はトルコに帰ると言い出した。父親がいなくなったことで家族が不安な生活を送る中、昨夜ロビンが遅くまで家に帰らなかったため、サーリヤとアーリンと、サーリヤのアルバイト先の友人の聡太で探し回ってロビンを見つけていた。

翌日は、朝早く起きて電車に乗って、毎年家族でキャンプに行く、荒川の上流の河原に向かった。お菓子と飲み物を持って、電車のボックス席で食べた。私の横に座ったロビンはずっと外の景色を見ていた。いつもはお父さんが座る正面の席に、聡太くんが座っている。聡太くんと目が合うと、嬉しそうに笑ってくれて、私はなんだか、とても切ない気持ちになったんだ。

秩父の駅ちちぶから四人で、歩いて川へ向かう。

今日、ここにみんなで来たのはいくつか目的があった。まずは、ロビンに元気になってもらうため。お父さんがいなくなつて、一番寂しいのはロビンだっただろう。秩父の河原には石がたくさんあるから、好きな石をいくらでも探せる。

もうひとつは、お父さんに会いに行く前に、お父さんの故郷に似ているという場所に行きたかった。そうしたら、お父さんの気

持ちが少しでもわかるようになるかもしれないと思って。いつも、この山に囲まれた河辺に来て、お父さんは故郷を思っていた。私には、わからない故郷を。

到着すると、ロビンはさっそく聡太くんの手を引いて、お気に入りの石を探し始めた。バケツを持ってきたから、たくさん持ち帰れるんだって張り切っている。

河原には澄んだ川の水が勢よく流れ、ゴツゴツとした大きな岩場があって、黒や水色やオレンジの小さな石も一面にあって、河岸で風に揺れる緑の木々が、少し黄色く色づいている。すぐ近くに鉄道橋があり、そこをジョウキ機関車1が通る。

お父さんと来ていたときと同じ光景に、私はすごく安堵あんどしていた。

アーリンが私に近づいてきた。

「来てよかったね。私は、クルドとか行ったことないし、まじで全然どこか知らないけどさ。ここは結構、好きなんだよね」
アーリンは、少し恥ずかしそうに言った。

「うん……私も好き」

「だよ。でも川口も好きだよ。お父さんが帰るとかまじでありえないし、私は日本に居たい」

私は黙って頷いた。

遠くからロビンと聡太くんの笑い声が聞こえてくる。二人で川に足を入れて、水を掛け合ってはしゃいでいる。

「ねえ、私がロビンというから、二人で話して来なよ」

「……でも」

昨日の今日だから、ロビンから目を離すのは少し心配だった。でもアーリンは力強く言ってくれた。

「大丈夫、私を信じて。時間なくなるよ」

「……ありがとう」

アーリンが頼もしくて、ありがたかった。私には、聡太くんと話したいことがあったから。アーリンが、あっちの方が良い石あるよ、とか言って、ロビンを連れて行く。二人を見送りながら、聡太くんと、川を見渡せる場所を歩きながら話す。

「いつも、この辺でキャンプするの？」

聡太くんがあたりを見回しながら聞く。

「うん。釣りしたり、ケバブ焼いたり」

「めっちゃ楽しそうじゃん」

聡太くんは、お母さんと二人ではどこかに出かけることもない、と言った。

「ここ、なんか私の生まれたところに似てるらしい。でも、全然、覚えてないんだ」

聡太くんは、足元にあった石を拾って、少し考えてから言った。

「それはちよつと寂しいよね」

「……うん」

寂しい、その言葉が私の心にぴたりと来た。その時、私は、ずっと寂しかったんだ、と気がついた。

「俺はずつと赤羽だから。ずっと生まれた場所にいる」

私も、石を拾った。ゴツゴツしたその小さな石を見て、いつか学校の帰り道にお父さんが拾ってロビンに渡した石を思い出していた。どこにいても石は変わらないって、お父さんは言ってたけど、クルドの石がどんなだったかも私にはわからなかった。

「故郷って特別？」

「うーん。東京だし、ずっと同じ場所にいるから故郷って、あんまりわからない。赤羽は、地元って感じかな」

「地元……なんか、地元って言ったことないかも」

「サーリヤの地元は川口でしょ？」

聡太くんは、当たり前のことみたいに言ってくれた。

「……うん。私の地元は川口。それだけは、はつきりしてるね」

十年以上暮らして来た場所が私の心に思い浮かんだ。川口に流れる荒川は、濁っているけれど、そのすぐそばで、私は心の陽だまりを見つけて来たんだ。

「たぶん、生まれた場所を離れて、後から懐かしく思い出した時に、初めて故郷になるんだよね。そういうの、俺はまだ、ないなあ」

聡太くんの言葉が、心にじんわりと広がる。みんな、そんなにはつきりとした故郷があるわけじゃないんだ。

クルドでも、川口でも、どちらかでも、両方でも、私がどこを自分の故郷だと思うかは、自分だけの感覚に素直でいれば良いのだと思えた。

私たちは川の近くの岩場に座った。いつもの河川敷で、そうしているように。

石だらけの河原で、私はひとつ、思い出した。

「小さい頃、トルコで、お父さんが、タンジヨウ日に石をくれたことがある。村で一番綺麗な石だって」

「面白いね、お父さん」

聡太くんが笑って言う。

「……そうかな。ほんと、何考えてるのかわからない」

「俺も。母さんが何考えてんのか、全然わかんない」

「……お母さん、聡太くんの幸せが一番って、言ってたよ……」

私は、のりこさん（聡太の母親）と二人で料理を作ったときに、愛おしそうにそう言った、優しい顔を思い出していた。

「それなのにサーリヤのバイトを辞めさせるなんておかしいよ」

聡太くんは、そう言って唇を噛んだ。

「うまくいかないね」

すべての愛が、自分の思う通りに相手にトドくわけではない。

「そうだね。うまくいかない」

私は、自分とお父さんの関係を思い浮かべながら、そう答えた。

私たちは少しの間、そのままだった。ずっとこのままで居られればいいのに、と私は思う。

聡太くんは立ち上がると、足元の石を拾って、川に投げて水切りを始めた。水面をちゃちゃちゃ、と軽やかに跳ねていく石を見て、おー新キロクだ、と喜ぶ。

私も投げてみるけれど、ぜんぜんうまくいかず、ぼちゃんと沈んで、下手くそ！と笑われてしまう。

私は、すごく、聡太くんが好きだと思った。これがみんながいう恋とか愛とか、そういうものなのかはわからない。でも人として、この人が大好きだ。

初めて、クルド人であることを話して、そのまま、受け入れてもらえた。自分が知らないことを知ろうとしてくれた。

遠くから列車の音がガタンゴトンと近づいて来て、私はその音に、背中を押される。聡太くんと向き合うと、その頬に、自分の頬を、右、左のジュンでくつつける。

さようならの、チークキス（頬と頬をつける）をした。

ここに来た最後の目的は、今日で、聡太くんと会うのをやめることだった。息子を思うお母さんの思いを、聡太くんにはウラギってほしくない。それに、埼玉から出られない私にとられずに、聡太くんには広い世界に、歩み出して行ってほしい。

別れを言葉にはできなかった。それでも、私の気持ちは伝わった。

聡太くんは、私の両手を掴んだ。離れたくない。その手の力強さから、聡太くんの思いがよくわかった。強く掴みすぎたと思ったのか、すぐに手の力は優しくなった。でも手を放さなかったし、私も、放したくはなかった。時間が止まったみたいなのに、私たちは手を繋いだまま固まっていた。急に風が吹いて、水の音が高く響いてきた。

私たちの隣で、川は激しい流れを止めず、強い風が木々を揺らす。それでも、二人とも微動だにしなかった。繋がった手の温

もりはどんどん増していく。真っ直ぐに私を見る聡太くんから、思わず目をそらしてしまったけれど、それでも聡太くんは真っ直ぐに見つめ続けた。

私も真っ直ぐに見ると、聡太くんの瞳の中にいる自分と目が合った気がした。その瞬間、揺れ動いていたはずの心が、急にびたりと固まった。

私は、自分の大切な人、大切な場所、大切なものを、自ら手放すことはしない。聡太くんも、ロビンも、アーリンも、お父さんも、暮らす場所も全部、守りたい。

たとえそれが他の誰かに許されなくても。

家に帰ってから、ぐちゃぐちゃになっていた部屋を、アーリンとロビンと三人で綺麗に掃除した。ゴミは私とロビンで片付け、洗濯物はアーリンがやった。足の踏み場もなかったのに、三人で協力し合えば、あつという間に普通に暮らせる空間になった。

三人で、いつもお父さんが作ってくれていたクルドの料理を作ってみたけど、教わった通りに作ったのに、やっぱり少し違う味がした。

*

それからの一週間で、気温が一気に下がった。もう薄手のコートでは寒いくらいになった。お父さんは、変わらず入管施設に収

容されている。夏から初冬へと季節が変わる間、何も変わらず、何もできず、あの場所で過ごしていることを思い知る。山中先生（サリヤー一家を支援している弁護士）が、お父さんに冬物の差し入れをしようと、家まで手伝いに来てくれた。

冬物のお父さんのサギョウズボンのポケットから、初めて見る手帳のようなものを山中先生が見つける。

「これ、見て」

その手帳を、山中先生は私に渡した。小さな古いノートだ。毎日解体(建築関係の仕事)の現場に持っていたのか、ずいぶん長く使っていたのか、表紙がすっかり黒ずんでいる。

中を開くと、日に焼けたページには、日本語で、私たち家族の名前がぎつしりと書いてあった。

サリーヤ、アーリン、ロビン、マズルム(サリーヤの父親)、ファトマ(サリーヤの母親)。日本語を覚えるため、何度も練習したのか、最初は変な形だったけど、だんだんときちんとした文字になっている。鉛筆で書いた字を手で擦ったのだろうか、綺麗とは言えないけれど、何度も書かれた文字に、お父さんの強い意志を感じた。

お父さんは、ここで、生きようとしていたんじゃないのか。私は、山中先生に、心からの願いを伝えた。

「お父さん、帰らせないようにできませんか？」

鞆かばんにセーターを詰めていた山中先生は困ったように眉毛まゆげを下げた。

「もちろん、僕だつてそうさせたい。でも、意思が固いんだ……」

「どうしてですか？ 帰ったら捕まる危険があるのにおかしいじゃないですか。止めてください。先生、お願いします」

山中先生は、しばらく考え込んでいた。私は、もう引かないつもりだった。真っ直ぐに山中先生を見つめ続けた。

④ 山中先生はふーつと息を吐くと、腹を決めたように話し始めた。

「言わないで頼まれていたんだけど……。在留資格を失ってしまった外国人でも、日本で育った子どもにだけビザ(入国許可証)が出たケースがあるんだよ。その家族の場合はね、親のビザを諦めた代わりに、子どもにビザが出たんだ。お父さんは入管の中でそのことを知って……自分だけ帰ると言い出したんだ」

「……」

私は言葉を失った。

山中先生の話では、そもそも日本は血統主義だから、日本で生まれても、日本人の血が流れていないと国籍が取れない。でも、

あるタイ人の親子は、滞在資格を失ってしまった親が帰国することで、日本で生まれ育った子どもにのみビザが出たらしい。クルド人でも、日本の大学やセンモン学校に進むことができた人だけに、留学ビザとして滞在許可が出て、そこからシウシヨクにも繋げることができた例があるのだと。

そういう例があることに希望をかけて、お父さんは自分一人で帰ることを望んでいるのか。私の頭は真っ白になった。私たちのために、わずかな可能性に賭けて、自分の命を危険にさらしてまで帰国を決めるなんて……。そんなこと、私にはとても受け入れることはできない。

「君たちのことは、ロナヒさんとメメットさん(近所に住む母方のいとこの夫婦)に任せるとお父さんは言っている。これまで助けてくれたお返しをしたと言ってくれているそうだ……」

その優しさは、身勝手だ、と怒りさえ湧く。

「お父さんは……勝手すぎます」

「確かに、そうとも言える。でもね、今の日本がお父さんにそうさせることを、僕たちは理解しなくちゃいけないんだ。家族を別々にすることで、一方を居させるなんて、あつてはならない。なんて残酷なんだと僕は思うよ。子どもが安全に家族と暮らすケンは、世界中の誰にでも認められているんだ」

山中先生の言葉が、私の胸を突いた。お父さんの決断も、それを強いる社会も、どちらも、私には納得ができない。誰が、なんのためにそんなことを強いるのだろうか？

ふと気づいて、お父さんのノートを反対から開いた。

横書きでびっしりと、長い文章が書いてある。それは、小さく、コマかな文字で、二十ページ以上続いていた。ページによって、インクの色が違うから、長い期間、たぶん何年にもわたって、少しずつ書き継がれたようだ。これは、クルド語だ。

私は、そこにはきつとお父さんの本当の気持ちがかかっていると感じた。

山中先生は、それをしばらく見て言った。

「きつとお父さんは、忘れないために書いたんだ。クルドのことを。自分が誰であるか。遠くの土地にいても、自分であり続けるために」

私もアーリンも聞こうとしないから、お父さんはクルドのことを話さなかった。お父さんは長い間、一人でどんなことを、どんな思いで書き続けていたのだろう。

クルド語だということだけはわかっていても、そこに、何が書いてあるのか、私には読むことができない。誰かに聞けば、内容はわかるだろう。でもその時、私は、それを自分の力で読みたい、と思った。お父さんを、自分の力で知りたい。

クルド語を覚えたいと思ったのは、生まれて初めてだった。

お父さんと向き合っていなかったこと、お父さんの思いを知ろうとしなかったことを後悔したのも、これが初めてだった。これまでずっと、あんなにそばに居たのに。いつでも話せたはずだったのに。

*

入管の周囲の風景は季節がめぐっても、ほとんど変わらない。アスファルトの道路と倉庫街にはトラックだけが行き交い、生きている自然や、そこで生活をしている人が、ほとんど存在しないからだ。相変わらずの無機質な入管の建物の中に、お父さんはもう四ヶ月もいる。もっともっと長く、何年も収容されている人もたくさんいる。その中で、病気になるったり、将来に絶望して自ら命を絶つ人もいるらしい。夏だってエアコンが効いてなかったのだから、冬の寒さはさらに¹²キビしくなるだろう。

そのことを改めて感じながら、面会の受付を終えた。

今日は、お父さんの冬服を差し入れた。山中先生にお願いして、私一人で来させてもらった。二人だけで、話がしたかったから。

お父さんと二人だけで話すのは、すごく久しぶりだった。

面会室に入ってきたお父さんは、前回会ったときより、さらに痩せてしまっていた。髪も髭も、白髪が増えて、ボサボサのまま広がっている。この面会室からは見えないけれど、お父さんのこの姿を見ただけで、入管施設の環境の辛さがよくわかる。こんなところから、早く出してあげたい。でも、お父さんだけトルコに帰るのは、嫌だ。今日はそれを、伝えるつもりで来た。私はノートを取り出して見せた。

「これ……お父さんのノート、見たよ。日本語、練習してたんだね。日本で生きていこうって思って、練習したんでしょ？」

お父さんは、ノートを見て、驚いたように目を大きく開けた後に、ふっと息を吐いた。

「それを書いたときは、まだ、難民申請もだめになってなかったからね」

ノートの最後に書かれたクルド語の文章をお父さんに見せる。

「これは？ 何が書いてあるの」

「それは……俺が、クルドに居たときにあったこと。子どものころにあったこと……家族がされたこと……」

そう言うと、お父さんは言葉を詰まらせた。ずっと奥のほうに仕舞っていた記憶の扉を開けることが、苦しいのかもしれない。

「私、自分の力で読む。クルド語、勉強するから。教えてよ」

お父さんは、優しく微笑んでから言った。

「もうすぐ、国に帰ることになる。俺が帰っても大丈夫なように、いろいろ準備してる。ロナヒに頼んであるから、しばらく一緒に暮らしなさい」

「お父さん、帰らないで。ここに居て」

私は、真っ直ぐにお父さんの目を見て、はっきりと伝えた。お父さんの瞳の奥が揺れたのを感じた。固い決意だって、私ならば崩せるかもしれない。そのとき、そう思った。

「裁判しよう。一緒にいられるように。きつと、いつか大丈夫になるから」

続けて私がそう言うと、しばらく間があった。お父さんは、私の言葉を飲み込んで、それにどう応えるか、ゆっくりと考えているようだった。数分後、口を開くと、

「……クルドの家のそばに、オリーブの樹があったの、覚えてる？」

と言った。思いがけない話題で、会話の流れを変えられてしまった。

私は、今暮らしているアパートのベランダにあるオリーブの樹しか知らない。お父さんが言った、クルドのオリーブの樹を思い出すことができずに、ただ無言でお父さんを見つめた。

「サーリヤが生まれた時、ファトマと二人で植えた。毎年一本ずつ植えて、いつか林にしようって。でも、五本しか植えられなかった。それ以上、居られなくなったから」

お父さんは、少し俯いて目を閉じて、何かを思い浮かべていた。それから目を開けて言った。

「お前のお母さんは、オリーブの樹のすぐ近くで眠ってる。一人きりで。だから、そばに行くんだ。今の季節なら実がついてるかもしれない。覚えてる？　ここに来る前、一本、一緒に植えたの？」

お父さんにとって、それが大切な記憶であることが伝わってくる。オリーブの苗を植える、お父さんとお母さんと、小さい私も、私には、どうしても、そのことが思い出せない。

⑥「目を閉じて」

急に言われて、戸惑っていると、早くつぶって、と促される。

⑦「今、何が思い浮かぶ？」

目をつぶって、私は素直に、一番初めに思い浮かんだ光景を口にした。

「……なんだろう……ラーメン……みんなで行ったところ」

仮放免（働いたり自由に移動したり）になつて、もう希望がなくなったと思った時に、家族でラーメンを食べた。あのひとときの幸福が、私が今、一番欲しいものだ。お父さんは私の答えを聞いて微笑んだ。

「お腹空いたの？」

「ううん」

お父さんが、人差し指と中指をお箸みたいにして、ずずーと音を立てて、ラーメンを食べるふりをした。

私も、おんなじようにする。指の箸を上下させて、ずずとラーメンを食べる。アクリル板を挟んで、お互いにその動作を繰り返した。笑いながら、目から涙がこぼれ落ちた。

子どもの頃に戻ったみたいだった。私も、お父さんも。お父さんを心から信じて、大好きでたまらなかったあの頃。いや、今だって、本当はそうなんだ。

でも、親子であつても、私とお父さんが一番に心に思い浮かべる風景は違う。私にとっての故郷は、クルドではなくて、ここではないことが、お父さんにも、伝わっている。お父さんは笑って言った。

「これからは好きなように食べて」

「……うん」

私は、確信を持って答えた。お父さんは、自分を犠牲にしても、私たちにとっての故郷を守りたいと思ってくれた。故郷は、お父さんにとって、すごく大事なものだからこそ、そう思ってくれたんだ。

こんなことを強いる社会は間違ってる。お父さんを犠牲にしてしまうことなんておかしい。いろんな思考が頭を駆け巡る。でも、何より強かったのは、お父さんの、私の故郷を尊重してくれようとする思いを、しっかりと受け取らなければいけないという気持ちだった。それは、お父さんにとってのクルドを大切にすることにも繋がる気がした。

面会の終了時間です、と職員が部屋の外から声をかけた。

「まだ……」

もう少し、話していたかった。今なら、やっと、お互いの思いを包み隠さずに話すことができるんじゃないかと思う。でも、お父さんは、これ以上面会室に居られなかった。

「自転車、解体の置場の倉庫にある」

お父さんの両手のひらが、目の前に現れる。お父さんは、目をつぶり、ふーっと息を吐き出す。その姿は蛍光灯の光に照らされて、神々しい。

Insallah em ê rojên ronahî bîbîn

いつものクルド語のお祈りの言葉だ。お父さんは、顔を洗い流す、いつものお祈りの動作をすると、優しく微笑んだ。

毎日トナえた言葉の意味さえ、私は知らない。でも今、なんとなくだけれど、私は、それがどんな意味だったのか、わかった。^⑧
私は、壊れた水道みたいに涙と鼻水が流れ出すのを止められなかった。

お父さんは立ち上がり、部屋を出ていく。その大きな背中が小さくなり、足音が遠くなっていく。

私はしばらく立ち上がることができず、電池切れしたみたいに座ってた。涙と鼻水と一緒に身体力が流れ出してしまったみたいで、入管の職員が、タイシュツしてくださと呼びにくるまで、そのままそこに座ってた。^⑭

でも、私はきつちりと意志を持って立ち上がった。それから、涙は出なかった。

帰り道も、はつきりと覚えている。どうしてか、いつもよりもむしろ、物事がクリアに見えている。街の看板や道路の脇に咲くザッソウ、当たり前そこに存在に目がいく。今だからこそ、見たい景色があった。^⑮

そのために、私はまず、大事な相棒を取り戻しに行った。お父さんの働いていた、解体の置場。その片隅にある倉庫に自転車は隠されていた。埃がついたサドルとハンドルを手で払い、私は、自転車にまたがって、ペダルを漕ぎ始めた。

あの、荒川にかかる大きな橋を渡る。

埼玉から、東京に渡った。誰がここに、国境を引けるんだ。私には、それを越える力がある。私が、自分の進む道のハンドルを握ってる。自動車にも、大きなトラックにも負けない。流れには、流されない。

立ち漕ぎをして、思いつきスピードを出して力強くペダルを踏み続ける。踏めば踏むだけ、前に進む。

東京側の河川敷に着くと、自転車を降りた。聡太くんと、二人で来た場所だ。

川の反対側に、私たちが暮らしてきた街がよく見える。小学校があつて、高層マンションがあつて、住宅街があり、工場もある。川口の街。

お父さんとお母さんと一緒にここへやってきて、ここでアーリンとロビンが生まれた。いじめられたこともあったけど、友達もたくさんできた。いっぱい勉強もして、いろんな人に会った。秘密のバイトをして、初めて好きな子ができた。

私は、自分の足で、大地を踏んでいる。息を吸って、吐く。^⑨

私を見ている人は、今、誰もいない。

それでも、今、ここで、たしかに生きている。

Insallah em ê rojên ronahî bîbîn

あなたと私たちの未来に、光がありますように。

(川和田恵真『マイスマールランド』)

問1 〓線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓線部A「唇を噛んだ」(5ページ)・B「無機質な」(10ページ)とありますが、この言葉の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「唇を噛んだ」(5ページ)

- ア 不思議に思った
- イ 不満そうにした
- ウ 怒りにふるえた
- エ 感情を抑えられなかった
- オ 悔しさをこらえた

B 「無機質な」(10ページ)

- ア 大きくない
- イ あたたかみのない
- ウ 個性的な
- エ 頑丈な
- オ 古びた

問3 〓線部①「その時、私は、ずっと寂しかったんだ、と気がついた」(4ページ)とありますが、サーリヤはどのようなことについて「寂しい」と思っていたのですか。四十字以内で答えなさい。

問4 〓線部②「その瞬間、揺れ動いていたはずの心が、急にぴたりと固まった」(7ページ)とありますが、ここでのサーリヤの心の動きの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア バイトをやめさせられてしまい、これからの生活に不安を感じていたが、どんな時でも自分の味方してくれる聡太と見詰め合うことで、日本で生きていけるという自信が芽生えたということ。
- イ 聡太と別れなければならないことにためらいを感じていたが、聡太の真っ直ぐな視線から変わらぬ愛情を感じ取り、このまま聡太と別れることなく共に生きていこうと固く決意したということ。
- ウ いろいろな問題が起こり、これからどうしたらいいか分からずにいたが、自分のことを大事に思ってくれる聡太と見詰め合う中で、自分が何を守り大切にしたいのか、はつきり分かったということ。
- エ 家族との関係について長い間悩んでいたが、同じような悩みを抱えていた聡太と率直に語り合い、見詰め合うことで、家族を大切に思う気持ちは万国共通ののだとはじめて気づいたということ。
- オ 自分がクルド人なのか日本人なのか分からずにいたが、クルド人であることを受け入れてくれた聡太の優しい眼差しを前にして、自分はクルド人として生きていいのだと確信したということ。

問5 〓線部③「お父さんの強い意志」(8ページ)とありますが、これはどのようなものですか。三十字以内で答えなさい。

問6 — 線部④「山中先生はふーっと息を吐く」(8ページ)とありますが、ここで山中先生はどのようなことを考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サーリヤのお父さんから口止めされていたことをサーリヤに話していいか悩んでいたが、サーリヤの真剣な申し出を受け、もうこれ以上隠すことはできないとあきらめている。

イ いつかサーリヤのお父さんの思いを伝えねばと考えていたが、サーリヤの悲痛な態度を見て、とうとうこのときが来た。と覚悟するとともにサーリヤが受け入れられるか心配している。

ウ サーリヤの家族をこのような状況に追い込む日本の難民制度について触れないようにしてきたが、興奮しているサーリヤの様子を見て、今この話をして受け止められるかはかりかねている。

エ サーリヤのお父さんの意志をここまで尊重してきたが、お父さんが隠していることを白状してほしいと強く訴えるサーリヤの剣幕に押され、もうごまかせないと観念している。

オ サーリヤのお父さんの思いに感服していたが、そんなことも知らず子どものように聞き分けのないことを言うサーリヤの口ぶりに、いらだちながらもなんとか平静を保とうとしている。

問7 — 線部⑤「私は、それを自分の力で読みたい、と思った」(10ページ)とありますが、サーリヤはなぜこのように思ったのですか。その理由を八十字以内で答えなさい。

問8 — 線部⑥「目を閉じて」(12ページ)、⑦「今、何が思い浮かぶ?」(12ページ)とありますが、ここでの父の思いの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分との別れを受け入れられていないサーリヤに、サーリヤの母の眠る故郷の風景を思い出させることで、クルドに帰りたいという自分の意志を分かち合いたいという思い。

イ 長らく故郷に帰っていないサーリヤに、親子三人でオリブの樹を植えた故郷での出来事を思い出させることで、クルドでの幸せだったひとときを忘れないでほしいという思い。

ウ 家族が離れることに反対するサーリヤに、家族で過ごした時間を思い出させることで、どんな時でも家族の絆は消えることがないことを伝えたいという思い。

エ 自分を引き止めようとするサーリヤに、サーリヤ自身にとって大切な場所はどこなのかを確かめさせ、その場所がどこであらうとも尊重してあげようという思い。

オ 自分のために裁判を起こそうとするサーリヤに、今まで家族で築いてきた自由な生活を確かめさせ、これからも波風を立てずに自分の望む場所で生きてほしいという思い。

問9 ―線部⑧「私は、壊れた水道みたいに涙と鼻水が流れ出すのを止められなかった」(14ページ)とありますが、ここでのサーリヤの気持ちはどのようなものですか。百字以上百二十字以内で説明しなさい。

問10 ―線部⑨「私は、自分の足で、大地を踏んでいる」(15ページ)とありますが、ここでのサーリヤの気持ちはどのようなものですか。六十字以内で説明しなさい。

問11 ……線部の表現について述べたものとして、適切でないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「秩父」(2ページ)や「赤羽」(4ページ)など実在する地名を用いることにより、この話の中でサーリヤの家族に起きたことに現実感を加えている。

イ 「私には、わからない故郷を」(3ページ)・「たとえそれが他の誰かに許されなくても」(7ページ)では、特徴的な語り方をするので、今自分が置かれている状況を受け止めようとしながらも動揺を隠しきれないサーリヤの様子を表している。

ウ 「急に風が吹いて、水の音が高く響いてきた」(6ページ)・「川は激しい流れを止めず、強い風が木々を揺らす」(6ページ)では、サーリヤと聡太を取りまく状況が急激に悪化し、二人の心がすれちがってゆくことを暗示している。

エ 「それからの一週間で、気温が一気に下がった。もう薄手のコートでは寒いくらいになった」(7ページ)・「冬の寒さ」(10ページ)とあるように、父親との面会をこれから一層寒くなっていく時期に設定することで、サーリヤたちにとってより困難な状況が待ち受けていることを暗示している。

オ 作品中で「荒川」(14ページ)はサーリヤの住む埼玉県川口市と聡太の住む東京都北区赤羽の県境として描かれているが、サーリヤにとってはただの県境ではなく、クルドと日本の境界線のようなところとして描かれている。

カ 「小学校があつて、高層マンションがあつて、住宅街があり、工場もある。川口の街」(15ページ)というように、目に映るものを一つ一つ確かめるように挙げていることから、それらが立ち並ぶ自分の暮らししてきた街をあらためて見つめようとするサーリヤの様子がうかがえる。

問12 この小説を読み終えたAさん・Bさん・Cさん・Dさん・Eさんが日本における難民制度について調べたところ、次の資料1・2・3を見つけた。この小説と資料をもとに述べられた意見として、適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

資料1

	難民認定処理数(人)	難民認定数(人)	難民認定率
カナダ	29,951	16,904	56.44%
アメリカ合衆国	99,409	35,207	35.42%
イギリス	37,013	12,050	32.56%
ドイツ	245,585	56,586	23.04%
イタリア	95,200	6,506	6.83%
フランス	151,057	29,078	19.25%
日本	16,596	43	0.26%

先進7カ国の難民認定率（2018年） UNHCR のデータを元に作成

資料2

	難民認定処理数(人)	難民認定数(人)	難民認定率
カナダ	1,662	1,486	89.41%
アメリカ合衆国	674	502	74.48%
イギリス	933	472	50.59%
ドイツ	9,093	3,786	41.64%
イタリア	276	85	30.80%
フランス	2,549	665	26.09%
日本	1,010	0	0%

トルコ出身難民申請者の難民認定率（2018年） UNHCR のデータを元に作成

資料3

クルド人を難民認定 札幌入管、トルコ国籍は全国初 代理人「大きな一歩」

（二〇二二年八月一〇日 北海道新聞）

トルコ出身のクルド人で札幌在住だった男性（30）を「難民に該当する」と判断し、国の不認定処分を取り消した5月の札幌高裁判決（確定）を受け、札幌出入国在留管理局が男性を難民と認定したことが9日、代理人弁護士への取材で分かった。抑圧を逃れて来日したクルド人を支援する「クルド難民弁護団」によると、トルコ国籍のクルド人が難民認定されたのは全国で初めて。

ア Aさん「資料1を見ると、日本は難民の認定率が他の先進国に比べて著しく低くなっているね。この小説でサーリヤの家族が難民として認定されなかったのも珍しいケースではなかったんだね。」

イ Bさん「資料2を見ると、トルコ出身者は日本ではまったく難民認定されていないね。そもそも日本ではトルコ出身の人が難民申請をするケースが他国に比べて少ないのかもしれないけど。」

ウ Cさん「資料1と資料2を見ると、日本の難民認定率がそもそも高くない上、とりわけトルコ出身者の難民認定が難しいことがわかるね。何か特別な理由があるのかもしれないから、トルコやクルドについて調べてみた方がいいかも。」

エ Dさん「日本でこれだけ難民認定がされていないのには、小説内で出てきた『血統主義』（8ページ）以外にも他の理由もあるかもしれないね。もう少し、難民について調べてみると、簡単に日本の難民政策に問題があるとは言えないよね。」

オ Eさん「資料3を見ると、これは小説の中でサーリヤのお父さんが言っていた『あなたと私たちの未来に、光がありますように』（15ページ）というお祈りの『光』にあたる出来事だと言えるんじゃないかな。」

